

紙季折々

しき❀おりおり

日本製紙グループ

環境・社会コミュニケーション誌

Vol.12



神の名を持つ鳥「シマフクロウ」の森を守る。

アイヌ語で「コタンコロカムイ」（村の守り神）と呼ばれるシマフクロウ。かつては人間にとって身近な存在であった

この世界最大級のフクロウも現在では国内に130羽ほどしか確認されておらず、絶滅の危機に瀕しています。2010年10月、この鳥を守るため日本製紙グループでは、日本野鳥の会と共同で社有林にシマフクロウの保護区を設置しました。

写真提供：山本 純郎

「今日はシマフクロウにとって大きな1日、大きな1歩となりました」。2010年10月14日、野鳥保護区に関する協定調印式で、財団法人日本野鳥の会の柳生博会長は、開口一番、このように語りました。この協定で、日本野鳥の会と日本製紙(株)は共同で日本製紙の社有林に「日本製紙野鳥保護区シマフクロウ根室第3(約126ヘクタール)を設置し、絶滅危惧種であるシマフクロウを保護していきます」。

同じ時期に名古屋で生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)が開かれるなど「生物多様性」が注目される中、記者会見には全国紙をはじめ、通信社、専門紙など多数の記者が集まり、社会的な関心の高さを示しました。

日本野鳥の会と企業が協定を締結し、シマフクロウのためにまとまった面積を保護区とするのは初めての試みとなります。柳生会長は「今までなかったことをやるわけですから、色々な壁があると思います。その都度、一緒に悩んで、考えて、守っていきましょう」と熱く語りました。



↑調印式に臨んだ日本野鳥の会の柳生会長(写真左)と日本製紙株式会社の藤澤林材部長



←記者会見の様子

シマフクロウを守ることは豊かな自然を守ること

シマフクロウが生息していくためには、豊富なえさやすみかに適した大木など豊かな自然が必要です。しかし、開発による森林の減少や河川の荒廃で、「食」と「住」を支える生態系が徐々に失われ、絶滅の危機にまで追い込まれてしまいました。

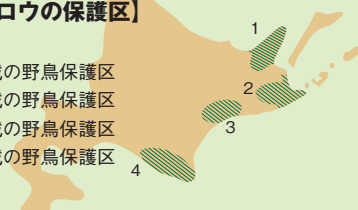
こうした中、今でもシマフクロウの生息する森が残

「日本野鳥の会」の取り組み

日本野鳥の会は、約5万人の会員・サポーターが参加する日本最大規模の自然保護団体です。シマフクロウをはじめとする絶滅危惧種を守る取り組みとして、保護区を設置し、環境管理や監視活動を実施しています。

【日本野鳥の会が管理しているシマフクロウの保護区】

1. 知床地域の野鳥保護区
2. 根室地域の野鳥保護区
3. 釧路地域の野鳥保護区
4. 日高地域の野鳥保護区



現在の保護区は全国で32カ所、合計面積は2,871haで、シマフクロウ、タンチョウ、イヌワシなどの暮らすサンクチュアリとなっています。この面積は東京ディズニーランド55個分に相当し、日本の自然保護団体が設置した保護区としては最大となります。

現在、シマフクロウが生息していない保護区に、巣箱などを設置し、繁殖できる場所を増やす取り組みも行っていきます

(写真提供: 環境省釧路自然環境事務所)



絶滅の危機に瀕する「シマフクロウ」とは？

● 世界最大級

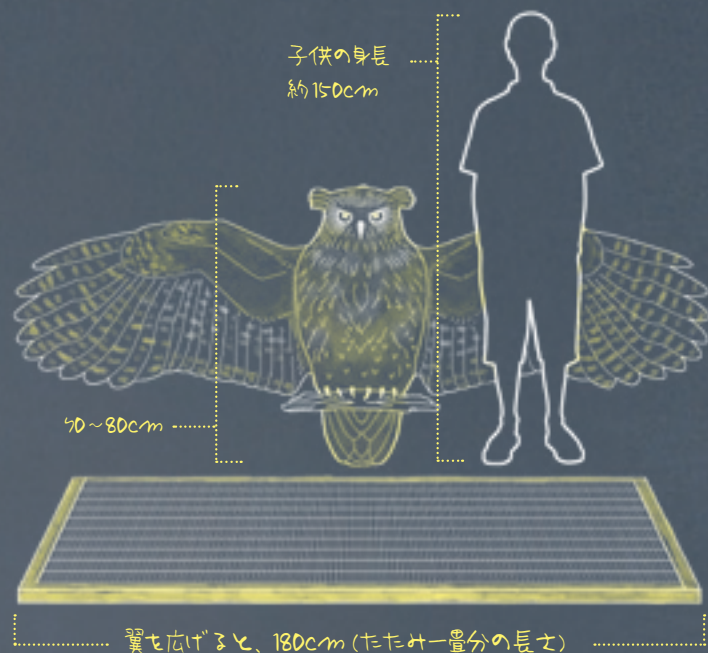
全長70~80cm、体重は3~4.5kg、翼を広げると180cmになる世界最大級の大きさのフクロウ、それがシマフクロウです。

● 名前の由来

シマフクロウの「シマ」とは北海道という島に住んでいることに由来しています。

● 北海道に130羽だけ

かつて日本では、北海道全域に1,000羽以上が生息していましたが、現在では北海道東部を中心に約40つがい、130羽が確認されるのみになりました。1971年に国の天然記念物に指定されるとともに、絶滅危惧種に指定されています。



● 「食」「住」が失われ、絶滅の危機に

【食】 川の中の魚をすくどい爪でつかまえます。親2羽とヒナ2羽の家族で年間約500kgの魚(20cmの魚で約5,000匹)を食べると言われ、魚が豊富な河川が必要です。



川で捕食するシマフクロウ

写真提供: 山本純郎

【住】 直径1mもある大木に開いた穴に巣をつくり、3月ごろ卵を産みます。そのため、古くから残る原生林が理想的なすみかです。



巣の近くに止まるシマフクロウの幼鳥

写真提供: 山本純郎

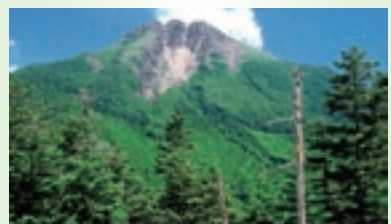
日本製紙(株)の社有林

日本製紙(株)は、北海道から九州まで、日本各地に総面積約90,000ha(東京23区の約1.5倍)の社有林を保有しています。全社有林で森林認証を取得し、持続可能な森林経営を進めています。

国内社有林での取り組み例

① 約20%を環境林分として保全

国内社有林の約20%にあたる約18,000haを環境林分(本文参照)として保全。多くの生物の営みの場となっています。



環境林分として保全されている日光白根山付近の社有林(群馬県)

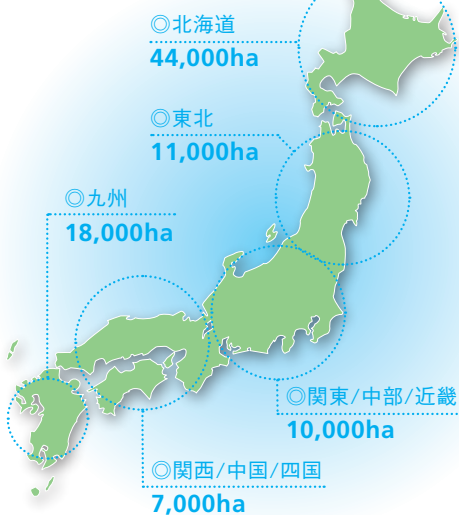
② 自然教室や植樹の場として活用

自然環境教室「森と紙のなかよし学校」や植樹活動「未来のためのいのちの森づくり」などを社有林で開催しています。



社有林で行った植樹の様子

【国内社有林の分布】





PROFILE

やぎゆう・ひろし

1937年茨城県生まれ。剣豪として有名な柳生氏の末裔。39歳のとき、NHKの朝の連続テレビ小説「いちばん星」に出演し、俳優としての地位を確立する。また、1981年から1993年の12年間に渡り、テレビ朝日の「100万円クイズハンター」の司会を務め、幅広い世代に認知される。1970年代末に山梨県大泉村(現・北柱市大泉町)に居を構え、雑木林を利用した作庭家としても活動を開始。1989年にギャラリー・レストランハケ岳倶楽部を開設する。2004年4月からは「日本野鳥の会」の第5代会長職にあり、同年12月に発足した「コウノトリファンクラブ」の初代会長も務める。

日本製紙とともにシマフクロウの生息地を守り続けます。

紙づくりは森づくりといわれるほど、紙と森は深い関係にあります。俳優、作庭家、そして財団法人日本野鳥の会の会長も務めている柳生博さんに、鳥や森との関わりのほか、日本製紙とともに取り組んでいるシマフクロウの保護活動について語っていただきました。

三十数年前にハケ岳に移り住み、役者も続けながら野良仕事を始めました。どうしてハケ岳だったのかというと、思い出深い土地だったからです。柳生家には13歳になったら一人旅をしなければならぬという家訓があって、僕は、その年の夏休みの1か月間、ハケ岳の南麓を走っている高原列車に揺られ、駅舎で寝泊まりしながら旅を続けました。その頃は手つかずの自然が沢山ありました。それから何十年も経ちましたが、森を見るとひたすら人工林で、花も咲かぬ鳥もいないという状態でした。それで、僕はとにかく稼いで土地を買ひ、人工林を切って、もともとあった広葉樹を植えよって思っただけです。そんなことをやってくるに至りますが、一番大事なことは、最初のうちは自分の家族だけでやっていたのが、そのうち「柳生が雑木林をつくっている」ということが評判になっているんな人達が来るようになったことなんです。大学生とか、研究者とか、行政の方達も見学に来て、これからどういふふう風景はあったらいいのかということや皆が考え始めた。そういう心ある人達が現れ始めた時期でもあったんです。

だいたい4年くらい経つと土ができて、虫が出てくる。そして、それを食べる鳥が来るようになる。そうすると、今度は柳生が野良仕事をする所へは鳥がいっぱい来るというのが評判になって、鳥関係の人もいっぱい来るようになった。それで、野鳥の会の顧問になって、7年くらい前に会長に就任しました。

長く野鳥の保護活動に関わってきて、最近感激したことがあります。去る10月、日本製紙と協定を締結して、約126haに及ぶ森林を「日本製紙野鳥保護区シマフクロウ根室第3」

として設置できたことです。今、シマフクロウは約40つがい、130羽が生息しているに過ぎず、とんでもない危機的状況なんです。野鳥の会では沢山の個人の寄付をもとにして約170haの森を買ひ取って「シマフクロウを守る野鳥保護区」をつくっていますが、そこでは4つがいしか見つかっていない。我々はシマフクロウのいる所はどこでも野鳥保護区にしたいんだけど、相手があることなので思い通りにはならないんです。だから、先般の協定締結はうれい限りで、何よりもそこで3つがい確認できたことが本当にうれしかった。

シマフクロウは食物連鎖の頂点に立つ動物のひとつで、その生息地は生物多様性に富んでいます。シマフクロウはアイヌ語で「コタンコロカムイ」と言うんですが、その意味は村を守る神様です。だから、獲って食おうなんて村人は誰もいなかったし、剥製にして売ろうなんて人もいなかったわけなんです。僕は「確かな未来は懐かしい風景の中にあります」といつも言うんです。かつて我々の先人達が自然と折り合いをつけて、豊かに生きていたあの風景なんだよと。シマフクロウが住める森は究極の美しい森だと思います。こうした森を今まで持っていた、これは奇跡的だということ思いでいっぱいなんです。日本製紙の方々は誇りに思っしてほしいです。

協定締結の記者会見の最後に挨拶として、日本製紙と一緒にシマフクロウを守っていく思いを新聞記者に語ったら、自然と拍手が起こった。私も色々な記者会見を経験しましたが、拍手なんて初めてです。きっと何かを感じていただいたんだと思いますね。



野鳥保護区を設置した日本製紙株式会社の社有林

CSR 報告書 2010 を発行

日本製紙グループでは、CSR(企業の社会的責任)に関わる取り組みをステークホルダーの皆さまに報告するためにCSR報告書を作成しており、2009年度の取り組みをまとめたCSR報告書2010を発行しました。今年度も、報告事項を重点テーマに絞り、読みやすい冊子作りを目指した「ハイライト版」と、CSR活動全般を網羅的に掲載することで説明責任の完遂を目指した「詳細版」の2種類のレポートを作成しています。

ホームページ(<http://www.np-g.com/csr/>)では、PDFを掲載するとともに、ご希望の方には冊子の郵送も行っています。ぜひアクセスください。



CSR 報告書 2010の表紙

編集後記

シマフクロウはその聡明な顔に似合わず、どんくさく愛嬌があるという話を柳生会長から伺いました。魚を捕るのも颯爽と捕るのではなく、ドカンと降りて捕まえるというようで、失敗することも多々あるそうです。そんなシマフクロウでも魚を捕まえることができるような豊かな自然が必要で、シマフクロウの住む森は「究極の美しい森」とも言えるとのことでした。インタビューの最後には、鳥の専門家の野鳥の会と木と森の専門家である日本製紙と一緒に頑張っていきましょう、と期待の言葉をいただきました。森の恵みを利用することで存続・発展してきた企業の一員として、この取り組みに貢献できればと感じています。(笹間)

お問い合わせ先

株式会社日本製紙グループ本社 CSR 本部 CSR 部 〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-2-2 TEL: 03-6665-1447
ホームページ: <http://www.np-g.com/inquire/> (お問い合わせ) <http://www.np-g.com/appliform/> (資料請求)

